

清末民国期直隸における棉業と金融 ― 移入代替から移出志向へ ―

山本 進

はじめに

明清時代、中国では繊維手工業を基軸とした商品生産が発達し、全国市場が形成されていた。開港後もしばらくの間、中国産土布（手織り棉布）は外国産機械製棉布と対抗し得たが、一九世紀末までに土布生産は衰退し、中国は棉花を輸出し棉糸・棉布を輸入する経済的従属国の地位に転落した。

世界市場への従属的編入に伴い、旧来の全国市場は大規模な構造転換を余儀なくされた。私見によれば、一九世紀中葉までの全国市場は、繊維手工業で栄えた江南を中核としつつ、数箇所に地域経済圏を生み出していた。このうち湖広や四川では土布の移入代替化による地域経済圏が形成されていたが、清代中期には直隸南部・山東北西部にまたがる地域でも、遅ればせながら移入代替棉業が勃興し、土布を直隸北部・奉天・山西などの周縁地域に移出して粟米や雑穀を移入するようになった。¹⁾しかしこの新興地域経済圏は充分な内発的發展を遂げる暇もなく、一九世紀末には市場再編の波に呑まれたのである。

まず中核の棉産地について言えば、外国製棉製品との競争に敗れて土布生産は衰退し、逆に天津や青島

の紡績工場向けや海外向けの棉花移出が増大する。棉花の作付は土布生産時代より拡大し、現在でも河北省や山東省は中国最大の棉花地帯となっている。一方土布の販売先について見れば、直隸北部の冀東地域では直隸南部の西河棉・御河棉に次ぐ東北河棉（小集棉）の産地となり、天津に棉花を移出するようになった。奉天は大豆の特産地となり、营口や大連を通して豆貨三品を華中南や海外に販売するようになった。その結果、土布の販路は山西や内モンゴル方面のみとなったが、山西でも徐々に棉花栽培が浸透し、鄭州や石家荘經由で棉花を天津に送り始めた。

世界市場包摂後の華北東部棉花市場については、冀東地方の東北河棉区を対象とした吉田滋一の研究が卓越している。⁽²⁾ 吉田の主要な論点は、当地の棉花商人が農民的商人であり、棉花取引には価値法則が貫徹していたこと、これまで所謂「前期的商人」論の根拠とされていた買付商の不正行為は相場変動に対応する自己防衛手段に過ぎなかったことである。吉田はまた、天津との棉花取引が一種の為替手形である匯票によってなされていたこと、すなわち棉花買付商が輿地（棉産地）で振り出す匯票が輿地の雜貨移入商に買い取られ、天津で決済されていたことを丹念に解明している。吉田の対象地域は東北河棉区に限定されているが、西河棉・御河棉・山東棉地域も基本構造に大差はないものと考えられるし、実証の水準で吉田の到達点を超えることは困難であろう。

本稿は吉田の成果に敬意を払いつつ、二〇世紀の直隸棉業を市場構造の転換という側面から考察するものである。吉田は別稿で小商品生産段階に到達した冀東棉業が富農経営を生み出したことを論証している。⁽³⁾ 確かに、冀東に限らず二〇世紀の華北ではおしなべて、棉作を導入した農村が収入を大幅に伸ばしている。⁽⁴⁾ 吉田は一九三〇年代の冀東棉業を、一八世紀の日本畿内の「小営業段階」に比肩するものと見なしているが、

発展段階論から近代華北棉業を理解することは無理がある。結論を先取りすると、二〇世紀の華北棉業は一九世紀までの伝統的棉業の延長上にあるものではない。むしろ内発的發展の結果として形成された在来棉業が外国製棉製品の流入によって破壊された跡地に、ある種の「半植民地」型棉業が創出されたのではないだろうか。

在来棉業が先進地江南産棉布に対する移入代替を契機として発達したのに対し、二〇世紀の新興棉業は移出志向性が強い。その一つの表れが、よく知られた中国棉からアメリカ種陸地棉への栽培品種の積極的転換である。しかし品種改良は必ずしも順調に進行したわけではなかった。むしろ注目すべきは、清末における急激な金融危機と民国以降の金融緩和である。東北河棉区の棉畑の多くが罌粟栽培からの転換であったとも言われているように、新興棉業は天津開港に伴う慢性的入超傾向の転換を目的として生じたのではないだろうか。

貿易不均衡がもたらした天津の金融危機については、貴志俊彦が袁世凱の通貨政策と産業政策から詳細に論じている。³⁾しかし銀錢票や銅元の追加供給にしても、土布の技術改良にしても、ともに弥縫的措施にとどまり、民国期の移出志向棉業を形成する素地となつたとは言いがたい。袁世凱の經濟政策は自律的な地域經濟を維持するための最後の試みだったのであり、それが失敗することによって、新たに「半植民地」型經濟が生まれたものと思われる。

如上の観点から、本稿では天津および西河棉地域を対象として、一九一〇年を境とした棉業の変容について、金融構造の側面から検討を加える。

一 清末天津の金融危機と直隸棉業

南運河・北運河と海河の交差点である天津は河運漕糧の積み替え地として栄え、やがて上海や營口などとの海上交易の拠点ともなった。天津が開港されたのは咸豊一年（一八六一）であるが、当初より輸入が輸出を大幅に上回っており、また後に主力商品となる棉花の輸出は微々たるものであった。二〇世紀初頭に至っても、天津に集荷される直隸棉花の品質は劣悪で、「天津市場市花ノ品質ハ、支那各市場中ノ最劣等ナルモノニシテ、純白ニシテ水色少シト雖モ、纖維短クシテ太ク、且ツ弾力ナク、只ダ混綿トシテ用フルノ外ハ中綿ニ供スルノミナリ」⁽⁷⁾、「当地ハ上海、漢口ト異ナリテ其産出、売買額共ニ商人ノ注意ヲ惹クニ足ラザルガ故、従ツテ慣習トシテ記ス可キモノナク、又天津ヨリ内地買込ニ向フ等ノコトハ絶無ニ屬ス」という有様であった。⁽⁶⁾天津の日本領事館も、「当北清ハ地区広漠ニシテ、綿花ノ耕作ニ適セス」と見なしており、また土布については、「当直隸省ノ重ナル産地ハ、南方ノ山東二境スル一帯ノ地方、即チ冀州・南宮・衡水等ニシテ、山東省ニ在リテハ德州地方ヲ最トス。以上直隸・山東省産ノ木綿織物ハ、其交界ナル鄭家口ヲ集散地ト為ス」と捉えていた。⁽⁷⁾ところが直隸南部の土布業は洋布の浸透により往時の勢いを失っていた。直隸・山東産土布の主要な販路は奉天方面であったが、清末以降の東三省は華中南や日本に大豆を移出して棉製品を移入する分業構造を基軸としており、華北東部棉業の役割は低下しつつあった。一九一〇年代には江南の通州土布さえ日本製棉布によって圧迫されるに至っており、⁽⁸⁾華北産土布が東三省で販路を維持することは到底不可能であった。

土布業の解体に危機感を抱いた袁世凱や各地の商会は織布改良事業に乗り出す。旧来の国産手紡棉系の

みで製織された旧土布に代わって、絨糸に輸入棉糸を使用する新土布の生産が、天津に近い高陽県や宝坻県で始まった。だが工場制手工業段階にとどまる新土布業では機械製棉糸布と対抗することは困難であり、かの高陽布も河南・陝西・内モンゴルから甘肅・哈爾濱・外モンゴル・直隸南部・山西・山東南部などへと市場を拡げたが、これらは主として輸入品が浸透し難い辺境市場であり、巨大市場に成長しつつあった東三省市場を奪還することは困難であった。高陽の商会は營口や吉林の濱江へ新土布を移出するため、天津で支払うべき関税を優免して欲しいと願っている。⁽¹⁰⁾

棉製品移入の増大による入超の継続により、天津の銀は急速に漏出し、天津は深刻な現銀不足に悩まされるようになった。一九世紀末の天津では營口の過炉銀に似た預金通貨が存在したが、金融危機の影響を受けて銀号の経営が悪化したため、一九〇二―〇三年頃に衰退した。⁽¹¹⁾ 〇三年には過賑抹兌銀を復活させ流動性を確保せよという意見も出されたが、実現には至らなかった。⁽¹²⁾ 蓋し預金通貨による振替決済は移出と移入が均衡していることが前提条件であり、慢性的入超構造の下ではその維持は本来的に困難なのである。

過賑抹兌銀に代わって、天津や北京では撥条と呼ばれる小切手が決済手段の役割を担った。『支那經濟全書』（東亜同文会、一九〇七―〇八年）第六輯には天津の事情として、「当地二八現銀不足ナルヲ以テ、日常ノ取引ハ凡テ振替勘定ヲ用フ。之ヲ撥条ト云フ。此振替ヲ為スニ用フル小切手ヲ称シテ撥条ト云フ。決算ハ一年一回ニシテ、其帳簿整理ノ方法ハ、外国銀行ト同一ノ方法ヲ用フ」（六二〇頁）とあり、また北京の事情として、「銀炉ハ摺子即チ通帳ヲ其取引先ニ交付シ置キ、其収支ヲ記入シ、五月、八月、十二月ノ三節ニ決算スルモノトス。其取引先ノ依頼ニヨリテハ、銀炉ノ帳簿上ニテ振替ヲモ為スナリ。銀炉ハ預ケ主ヨリ撥条ト称スル小切手ヲ振出入時ハ、之ニ対シテ支払ヲ為スベシ。是レ銀炉ハ銀票ヲ発行セザルヲ以テ、

銀炉ニ預ケ入レタル預金ヲ引出サントスル時ハ、預金主ヨリ銀炉ニ宛テ、撥条ヲ振出スモノトス。斯クテ票号、銀号、錢舖其他大商人ハ、皆此法ニヨリ銀炉ト取引ヲ為サ、ル者無シ。是レ銀炉ト取引ヲ為ス時ハ、当座貸越ヲ為スコトヲ得可ク、又毎日收入セル各種ノ銀兩ヲ銀炉ニ預ケ置キ、必要アル場合ニ撥条ヲ用ヒテ引出サバ、秤減ノ損ナキ等、其便利尠ナカラザレバナリ（六三六頁）とある。撥条は銀炉などの金融業者が預金者に与える小切手であり、定期的に決算が行われていた模様である。天津では錢舖が撥条を発給していたが、錢舖自身の信用が低いため不渡りとなる危険性が高く、現銀に引き換える際には高額の貼水割引⁽¹³⁾を強いられていた。

天津の銀不足は奥地から天津への現銀流出を加速させた。冀州直隸州南宮県は清代より土布の集荷地として有名であり、古諺にも「臨清の水碼頭、南宮の陸碼頭」と称されていたが、直隸南部の土布業が衰退した後も金融の中枢として活況を呈していた⁽¹⁴⁾。しかし清末には銀円（現銀）が大量に流出し、市場では憑帖（紙幣）が氾濫した⁽¹⁵⁾。宣統年間（一九〇九—一九一一）、南宮の万通鏢局（現銀輸送業者）は毎年百万円以上の銀円を德州經由で天津に輸送したと報告している⁽¹⁶⁾。順徳府でも、往時は毎年三〇〇万両に達する毛皮・土布移出によつて潤沢な銀資金を擁していたが、洋布の流入により山西への土布移出が減少したため、宣統期には移入超過と銀流出に悩まされていた⁽¹⁷⁾。

土布の銷路壅滞に苦しんだ直隸南部地域では、棉布に代わつて棉花を天津に移出するようになった。戦前の調査報告や先行研究によれば、天津の棉花輸出が激増する画期は一九一〇年である。天津付近では棉花をほとんど産出しないため、これらの棉花の大半は西河棉区と呼ばれる直隸南部より供給されたものと思われる。また南運河沿いの御河棉区や冀東の東北河棉区も天津向け移出を開始した。

だが、天津では現銀が払底し、撥条は天津市内の商人間でしか通用しないため、銀円による代金の支払いは困難であった。また現銀の輸送には危険が伴った。そこで清末より、棉花買付商は匯票を奥地の錢莊に持ち込んで錢票に兌換し、錢票で棉花を収買するようになった。

奥地向け為替が登場するのは棉花輸出が激増した宣統年間からである。既に見た通り、光緒末まで天津商人は奥地へ出向いて棉花を買い付けておらず、棉花の出廻りは「即ち農夫又八田舎ノ荷主ガ小船ニ大抵三十俵ヨリ五十俵（一俵平均百斤入）ヲ積ミテ天津ニ到リ、跑合兎（仲買人）ノ手ヲ經テ支那棉花商又ハ外商ニ売ルモノニシテ、凡テ現物現金売買ノミトス」（『支那經濟全書』第八輯、六二五頁）という程度のものであり、為替の介在を必要としなかった。当時天津の為替は炉房が担っていたが、取組先は「中二毛其重ナル取引地ハ北京、上海、奉天ナレドモ、其他炉房ノ設ケアル各地ト広ク相匯兌セリ」（同書、第六輯、六二三頁）とあるように外埠や大都市向けであった。棉花の流入以前、周縁地域は天津に向けて穀物を移出していたが、天津の糧棧は買客と呼ばれる買付商人にあらかじめ資金を貸し与えねばならず、その額は総計二〇万両から三〇万両に達していた。糧棧はその資金を錢号に仰いでいたが、光緒末の金融危機により資金の流れが滞ると、穀物収買はたちまち停止するという有様であった。¹⁸⁾

ところが、宣統年間に入ると状況は一変する。棉花移出が年間数百万元に達した正定府属の各県では、錢票の発行元である現地の錢舖が棉花の出廻り期に錢票価格を意図的に釣り上げるため、宣統三年、平和洋行の買辦杜克臣は錢票でなく銀円で棉花を買い付けられるように改めて欲しいと商會に請願している。¹⁹⁾ 杜克臣が現銀を正定府に持ち込んでいたのであれば、わざわざこのような請願をする必要はないから、天津と奥地との間は既に為替で決済していたのであろう。彼は匯票を現地の錢舖で銀円に兌換したいと希望

しているのであるが、奥地でも現銀が欠乏していたため、実現は困難であった。一方、天津から洋布を移入する奥地雑貨商も買付資金を為替で送金していた。大名府の洋布商らは匯票を天津に持ち込んでいたが、八月―九月には匯票がだぶついため、兌換が遅れると訴えている。²⁰⁾このように、民国期のような安定的な為替制度には及ばないものの、宣統年間より天津と奥地との決済には匯票が使われ始めた模様である。

以上のように、光緒末頃まで天津―奥地間の商品取引は基本的に現金により決済されていた。為替による決済体制が確立するのは、棉花問屋である棉棧が奥地での棉花買付を開始する宣統年間以降である。

二 移出志向棉業への転換と金融

宣統年間を境に土布生産から棉花移出に転換した直隸棉業は、従来の移入代替棉業から脱皮し、強い移出志向性を帯びるようになった。一九一〇年頃の主たる仕向地は上海で、太番手系の紡績用に適した毛筋物が移出されたが、中入れ用あるいは毛織物混棉用に適した粗毛物の海外輸出も次第に増大した。第一次世界大戦の勃発によりヨーロッパからの棉製品輸入が激減すると、日本や中国では紡績業が急成長し、天津にも紡績工場が建設された。これに伴い、繊維の長い毛筋物需要が増大し、当初より米棉種を導入していた東北河棉区が新興棉産地として注目を浴びたが、西河棉区や御河棉区でも次第に在来種から米棉種への転換が推し進められた。一般に直隸や山東の棉花はアメリカ産棉花との混紡に用いられたので、天津は中国最大の棉花輸出港であると同時に、大量の外国産棉花を輸入していた。²¹⁾

移出志向への傾斜は棉花の作付率を高め、食糧自給率を押し下げた。民国以降も西河棉区では穀物の不

足を関東からの移入で補充していたが、滿州事変により杜絶した。⁽²²⁾ 東三省に代わって食糧供給の役割を担ったのは、山西と河南であった。一説によると、日中戦争前、西河棉区の集散地石家荘に流入する雑穀の七割は山西産、三割は河南産で、それらの約半数は西河棉区の棉作農民に販売されていたと言われる。⁽²³⁾

このような再編過程を経ることにより、直隸土布業は東北市場を喪失しただけでなく、地元消費分さえも確保することが困難になった。民国以降、直隸南部の棉作地域は、天津に向けて棉花を移出し、天津より機械製棉糸布を移入するという分業関係を構築した。天津と奥地との決済は匯票を通して行われた。

匯票は天津棉棧の奥地買付員や地方の棉商などによって振り出され、奥地の雜貨商に買い取られて、天津で現金化された。棉棧の買付員を例に説明すると、次のようになる。

地方市場に於ける棉花の取引は殆ど現金で行はれてゐるが、棉棧が奥地にて買付を行ふ場合、現金を携行することは不便であり且危険も伴ふため、この匯票が一般に利用されてゐる。匯票の流通方法を簡単に示せば、先づ棉棧の奥地買付員は地方市場に於て本店払為替を切る（この為替は票根、匯票、存根に分たれ、票根は本店に送付され証憑となり、存根は発行人即ち買付員の控へとなり、匯票が為替となるのである）。買付員はこの為替を地方の有力商店（銀号、糧棧、棉紗莊、雜貨莊等）にて割引を受け、現金に引換へて地方花店に支払ふのである。一方地方の有力商店は物資を仕入れるため天津市場に出る時、現金を携行せずこの為替を持参し、為替発行棉棧に至り、その署名捺印を求め、指定銀号に至り現金を受領するか、又は同銀号の自己口座に振換へるのである。この場合棉棧は銀号に預金を有するものもあるが、多くは銀行に預金を有し、銀号は前記為替を入手したる後銀行にて割引を受け現金を受取るものが多い（『北支棉花綜覽』日本評論社、一九四〇年、三二〇—三二二頁）。

奥地での資金需要が旺盛な棉花出廻り期には貼水(折扣、貼色とも言う)つまり匯票の割引率は高騰するが、平時には最高でも一・四%を超えない。逆に春夏は棉花の出廻りが少ないので貼水は低下し、奥地雜貨商の天津における資金需要がこれを上回ると、匯票に打歩が付くようになる。これを倒貼(升水・加色とも言う)と呼ぶ。ただその率は高くなく、〇・一%から〇・二%程度である。⁽²⁴⁾

開港場と奥地との為替関係は東三省でも見られる。たとえば營口と鉄嶺との決済には過炉銀建て外城が替が使用され、鉄嶺と奥地農民との間は大銀貨や奉天票が用いられていた。⁽²⁵⁾ 満鉄沿線では送金手段として金票(朝鮮銀行券)が使用され、奥地での大豆収買には現地通貨である錢帖(官帖や私帖)が用いられていた。しかし、東北と直隸とでは金融構造が大きく異なっていた。

第一に、直隸の匯票は棉棧が振り出す為替手形に過ぎず、過炉銀や金票のような通貨としての機能がなかった。過炉銀は上海為替によって、金票は日本銀行券によってその信用を保証されていたが、棉商の匯票は天津の金融機関とは直接連絡がなかった。第二に、移出初期段階を除き、奥地での特産品収買過程や雜貨販売過程に現地通貨が用いられることもなかった。先に見たように、棉花の本格的移出が始まったばかりの頃は、棉棧の代理人は錢票によって棉花を買い付けていたが、やがて銀円での買い付けに転換するのである。

まず第二の点から考察しよう。一九三〇年に刊行された大島讓次著『天津棉花と物資集散事情』によると、金融界に於ける信用の範囲は極端に狭く、現代でも開港場を一步踏み出せば、手形類は愚か相当に信用の置ける、銀行券でさへ通用せず、国立銀行たる北平、天津に於ける中国、交通、両銀行の銀行券すら、纔かに鐵道沿線の北平、天津より遠くも石家莊、唐山附近迄しか通用せず、此れさへも時に北

平と天津との銀行券の間に、差額を生ずる始末にて、農民は勿論商人に至る迄、総て現金制度 然も銀貨は特に吟味された良質のもので無ければ通用しない（七五―七六頁）。

とあり、民国期の直隸農村部は極端な銀貨主義に傾斜していた。そこでは、奉天票や銭帖よりはるかに信用が置けるはずの中国銀行券や交通銀行券すら通行せず、往々にして両行の銀行券には差額が発生していた。銀行券の信用度の低さは北京・天津のような大都市や石家荘・唐山などの集荷地でも同様であった。⁽²⁶⁾この一文に続けて、大島は

然らば奥地各市場との金融決済は、如何にしてなされつゝあるかと云ふに、原則としては勿論現銀輸送に依るものであるが、途中の危険甚しく到底困難であるが為め、万已むを得ざる時の外は、一般に他に安全なる方法を求めて其決済を行ふのである、即ち先ず其の買付を行はんとする土地と、天津との金融関係を調査して、若し銀号或は雜貨商等の天津に対する、支払勘定を有する者あれば、是れに對し、天津の某処に於て其金額を、相手方に支払ふ旨を、記載した手形を發行し、之と引換へに其金額を譲り受けて、買付資金に充当する、一種の逆為替式の方法に依る、之を稱して匯票と云ふのである（七六頁）。

と述べる。匯票はあくまでも現銀輸送の危険性を回避するための便法に過ぎなかつたのである。取組先を求めることは直隸が大幅な輸入超過に呻吟していた、つまり奥地から天津への送金需要が卓越していた時代には比較的容易であり、棉棧の振り出す匯票が打歩を付加して買い取られることもあったが、奥地の棉花移出が本格化すると取組先を探すのが困難になり、現地の銀号で割引を受けるようになった。大島は続けて

以前天津に於ける、棉花其他現今の重要輸出品が、未だ多量に輸出されるに至らなかつた頃に於ては、奥地に於ける買付資金の決済は比較的容易であり、花行若しくは商人自身にて、低廉な為替料を支払つて匯票の相手方を求め、又時には先方より資金の流用を申出する者あり、匯票を利用した上に、幾分の為替料を取得すると云ふが如き、場合もあつた程であるが、民国六七年以来棉花の輸出激増し、従て産地買付を行ふ者増加し、茲に漸やく資金の決済難を生じ、数十里より百数十里の地方に迄、匯票の相手方を求めるに至り、遂に此事務は銀号の手に委ねる様に成つたのである（七七頁）。

と述べており、一九一七—一八年頃から棉花移出の激増に伴う慢性的入超構造の改善により、銀号による手形割引が盛んになつた。棉棧は奥地における為替相場を勘案し、銀円を現送するか、地方商人に為替を直接交付するか、銀号で割引を受けて現金で支払うかを決定して⁽²⁸⁾いた。このように、天津—奥地—棉作農民間の決済は一貫して銀円とその為替によつてなされていた。

次に第一の点について見よう。既に述べた通り、棉花の収買に際して匯票を發行するのは天津の棉棧であり、天津の銀号ではない。匯票は基本的に天津の棉花買付商と奥地の雜貨店との間を往復しているだけであり、やがて銀号が匯票の売買に参加するようになるが、天津銀号が棉棧の裏書のない匯票を⁽²⁹⁾買取ることはない。信用創造の出発点はあくまで棉棧なのである。

但し棉花の移出には銀号の存在が不可欠であつた。何故なら、棉花の奥地買付は弗建であるに拘はらず、天津に於ける売買は銀両建てで有るが故に、支那側の棉花業者は常に銀号と密接なる連絡を保ち、毎日午前午後の二回に支那街の錢業公会に於て建てらるゝ、弗銀対銀両の相場を有利に捕捉して、銀両を以て受入れたる棉花代金を弗銀に換算し、之を以て買付資金の精算をなす為めに、或は奥地向け匯票を買入れ、

或は已に融通を受けたる資金の返済に当てる」(前掲大島、一八九頁)からである。棉棧は外商から棉花代金として受け取った銀両を銀号に持ち込んで銀円に兌換し、それを匯票の支払いに充てねばならなかったのである。銀両と銀円との相場は常に変動するので、彼らは常に為替相場を見ながら売買を行っていた。

もちろん、天津にも為替専門業者である匯兌商はいた。匯兌商は無保不付(本人確認後払い)と憑票取錢(持参人払い)という二種類の匯票を発行しており、後者は即時換金できるので外郷過客(他県・奥地の客商)にとつて便利であつたが、盗難や遺失の際に原款が還付されない危険性が伴つた。そこで彼らは無保不付匯票を買い入れ、これを天津の金融業者に持ち込んで現金を入手していたらしい。西関の貨棧(この場合、雜貨輸入商)や商会未加入の小錢舖は、外郷過客が持参した無保不付匯票を割り引いたり、手数料を取つて保証人になつたりして、利鞘を稼いでいた。だが、彼らの経営は零細で保証能力が低いため、匯票の信用が低下することを危惧した匯兌商側は、民国一〇年(一九二一)天津總商会を通して貨棧や小錢舖による手形割引などの諸活動を禁止させた。⁽²⁹⁾この措置により、匯兌商が販売する無保不付匯票は、棉棧の振り出す匯票より信頼性が高いにもかかわらず、天津―奥地間の棉花移出・雜貨移入の決済手段としては不便なものとなり、棉花の出廻り期間に自己資本を高速回転させたい奥地商人から敬遠されるようになった。因みに、天津棉棧の匯票は通常一覽後七日払いという簡便なものであつた。⁽³⁰⁾

とは言え、天津に奥地為替専門の銀号が全くいなかったわけではない。王子建・趙履謙著・渡邊安政記「天津の銀号」、『滿鉄調査月報』二二卷三・四号、一九四二年。原著は『天津之銀号』天津商工学院、一九三六年)によると、

以上は比較的規模の大なる銀号に就て云つたのであるが、此の外尚一種の為替業専営の銀号があり、

俗に之を「収交」と云ひ、全市金融市場上に於て又別の一系統を成して居る。之等銀号の大部分は奥地錢莊の分号或は代理人で、其の規模は極めて小さく、精々一、二人に依り銀号全部の業務を行つて居り、奥地に於ける貨物代金及び為替金額の「収交」に従事し、其の他の営業は取扱つてゐない（一五四頁）。

客棧及び貨棧内に於ける為替莊の如きに至つては其の所在分散し組織は無く、且つ一年中常に営業して居るのではなく、随時開閉して居る為其の総数を推測することは極めて至難である（一五五頁）。天津と奥地との為替は多く銀号が直接処理してゐる。蓋し之等外幣銀号は奥地に均しく聯号を持ち、大抵「抵」商店に代つて金銭の受渡しを為し自ら其の平準を求めてゐるからである。之等の銀号は普通銀号の規模を有し、為替業務を専営してゐるが、今日では其の数も多くない。一般に奥地為替経営者の大半は規模が極めて小さく、客棧・貨棧等に於て一、二人の手に依り其の仕事が処理され、一切の対外対内事務は総て此の一、二人の者に依り主持せられて居る。又奥地と天津との貿易関係は共に季節性がある為、此等「収交家」（渡受人）の多くは特殊の現象として商業の盛衰に随ひ、随時其の経営を開閉して居る（一六三頁）。

とあり、貨棧の内部には「収交」「収交家」と呼ばれる為替専門業者が寄宿しており、彼らが貨棧に代つて為替業務を分掌していた。しかしその経営規模は極めて小さく、また年中営業しているわけでもなかった。ここで注目すべきは、収交家の大部分が奥地銀号の分号ないし代理人であることである。曲直正によると、民国期、天津の銀号には山西票莊幫・本地幫・南宮幫の三グループがあつたらしい。⁽³¹⁾ 既述の如く、南宮県は直隸南部の金融中枢であつたが、民国期になると南宮商人の多くは天津や保定に進出した。⁽³²⁾ 天津の収交

家の多くは彼ら南宮幫商人であつたと思われる。曲直正は「現天津有南宮幫商人開設之錢莊六・七家。家數雖少。然其營業頗為發達。南宮及直南一帶之商人。因鄉誼關係。所有存款及匯兌事務。多託南宮幫代辦」と言つており、⁽³³⁾ 錢莊を開設している者は少数であつたが、奥地との信賴關係を背景に収交家として活躍していた者は少なくなつたであらう。

それでは、南宮県のような奥地出身の商人が天津にて有利な地歩を占めることができたのは何故であらうか。民国期の東三省では、大豆集荷の主導權を握つていたのは官銀号の融資を受けられる官商系糧棧であつた。しかし直隸では、棉棧が銀行から融資を受けることは少なくなつた。彼らが頼るのは主に銀号であり、⁽³⁴⁾ その多くは前に見た通り、収交家のような奥地銀号の分号であつた。一方、奥地の棉作農民も東三省の大豆作農民のような青田売買を行わず、⁽³⁵⁾ 逆に余つた資金を棉花店内の自己口座に預金していた。そして棉花店はその資金を棉花収買商に貸し付けていた。⁽³⁶⁾ これらの資金は収交家を通して棉棧にも流入していただろう。東三省とは反対に、奥地に銀円資金の余裕があつたことが集散地金融機關による流通主導權の掌握を遅らせ、自律性を温存せしめたのである。吉田滋一が東北河棉区で見出した、棉作農民による生産性を無視した労働強化は、一九二〇年代から三〇年代を通した中国棉花の国内・国際市場での有利性によるものである。

おわりに

清代中期までに後発的地域經濟圏を形成する原動力となつた直隸・山東の移入代替棉業は、宣統年間を

境に大きく変貌した。洋布の流入により最周縁地域への土布移出は減退し、直隸棉業は東三省市場をほぼ失った。土布に代わって主力商品となったのは、海外市場向けや上海・天津・青島など国内紡績工場向けの棉花であった。一九一〇年を境に棉花移出は飛躍的に上昇し、棉産地も西河棉区から御河棉区、更には東北河棉区へと拡大した。清代の棉業が江南棉布の移入代替生産であったのに対し、民国期棉業は強い移出指向性を帯びていた。

棉花移出開始の直前、直隸は深刻な入超に喘いでおり、大量の銀が流出して天津を金融危機に陥れたが、棉花移出が増大するにつれて入超傾向は改善され、やがて出超に転換すると、今度は大量の銀円が直隸に還流した。このため奥地は極端な銀貨主義に傾斜し、国立銀行券の通行さえ困難となった。棉花の決済には銀行券や為替業者の匯票ではなく棉棧の匯票が選好されたが、棉棧を金融面から支援していたのは銀号であった。銀号の中には山西幫や天津幫に交じって南宮幫も存在し、彼らは奥地の銀円資金を天津に回流させる役割を果たしていたものと思われる。このように、奥地の金融力は集荷拠点である開港場の金融力に拮抗し、銀行の特産物流通への進出を阻止した。

註

- (1) 拙書『清代の市場構造と経済政策』名古屋大学出版会、二〇〇二年。
- (2) 吉田滋一「二〇世紀前半中国の一地方市場における棉花流通について」『史林』六〇巻二号、一九七七年。
- (3) 吉田滋一「二〇世紀中国の一棉作農村における農民層分解について」『東洋史研究』三三巻四号、一

九七五年。

- (4) 鄭起東『転型的華北農村社会』上海書店出版社、二〇〇四年、四三〇頁。
- (5) 貴志俊彦「清末、直隸省の貿易構造と経済政策」島根県立国際短期大学『紀要』二号、一九九五年。本稿は吉田や貴志の成果を土台としているが、歴史的事実の再確認については註記を省略する。
- (6) 『支那経済全書』第八輯、東亜同文会、一九〇八年、六二五頁。
- (7) 『通商彙纂』明治三九年二号「清国北部二於ケル需要陶磁器、錫器、紙、扇子、団扇、織物、木綿類二関スル調査」。
- (8) 『満洲二於ケル棉布及棉糸』関東都督府民政部庶務課、一九一五年、八一頁。
- (9) 民国『高陽県志』卷二、実業、布業之發達及其衰落。
- (10) 『天津商会檔案匯編（一九〇三—一九一一）』天津人民出版社、一九八九年、一三三—一三三頁、「高陽商會陳述高陽土布運銷奉天營口吉林濱江等地請免天津新聞之稅文」（宣統元年八月八日・二二日）。
- (11) 宮下忠雄『中国幣制の特殊研究』日本學術振興會、一九五二年、四九七頁。
- (12) 天津『大公報』光緒二十九年一月九日「清平津郡市面」。拙稿「清末東三省の幣制——抹兌と過帳——」九州大学『東洋史論集』三五号、二〇〇七年。
- (13) 『袁世凱奏議』天津戸籍出版社、一九八七年、七八〇—七八一頁「天津銀根枯竭請勅部撥款補救摺」（光緒二十九年四月五日）。
- (14) 民国『南宮県志』卷二、掌故、謡俗、風俗
且南宮為四方輻湊之区。大名以北。金融漲落。一惟南宮是視。古諺云。臨清水馬頭。南宮旱馬頭。

- (15) 『天津商会檔案匯編（一九〇三—一九一一）』一〇〇二頁、「南宮県知事陳述京漢路通車前津埠洋貨運往河南路經南宮情形文」（宣統二年八月一九日）。
- (16) 同右、一〇九九—一一〇〇頁、「万通鏢局李永昌函告天津德州兩地每年運銀一百余万元」（宣統二年二月一七日）。
- (17) 同右、六七五—六七九頁、「順德府各行商五十八家招股五万吊請立裕順公票局發行紙幣文并附章程」（宣統二年三月九日—五月二四日）。
- (18) 同右、一九八—二八三頁、「天津府凌福彭為津邑糧商董事請發官款購運京津越冬貯備糧事照、會津商務公所」（光緒二十九年九月二日・三〇日）。
- (19) 同右、二二五—二二六頁、「平和洋行買辦杜克臣申述正定府各県棉花出口每年達数百万金出使錢票各商高擡市價請將錢票改為龍洋文」（宣統三年三月一五日）。
- (20) 同右、一一〇三—一〇四頁、「大名商務分会陳述該郡百貨無一非津市運來而津郡民食全賴大名等郡接濟文」（宣統三年九月一九日・一〇月五日）。
- (21) 前註(2)吉田、二—六頁、「大島讓次、天津棉花と物資集散事情」一九三〇年、六一—八頁。なお東北河棉は中人れ用として東三省・内モンゴル方面に移出されていたが、天津紡績業に吸引されて撤退している。『支那ノ棉花ニ関スル調査』其一、臨時産業調査局、一九一八年、八二・八九頁。
- (22) 『河北省農業調査報告』二卷、南滿洲鐵道株式会社天津事務所調査課、一九三六年、九九頁。
- (23) 『石門市内貨棧業調査報告』南滿洲鐵道株式会社調査部、一九四三年、六一頁。
- (24) 曲直正『河北棉花之生産及販運』商務印書館、一九三一年、一七〇頁、葉謙吉著・白井行幸訳「西

- 河棉の生産と運銷について」、『滿鉄調査月報』一九卷四号、一九三九年、一五〇頁。
- (25) 拙稿「清末民初奉天における大豆交易——期糧と過炉銀——」名古屋大学『東洋史研究報告』三二号、二〇〇七年。
- (26) 民国『井陘県志料』第九編、金融、本県通用貨幣一覽にも
数年前。本地除現洋外。紙洋概不收受。迨民国十五・六年。山西省鈔。藉軍政特殊勢力。強迫人民
使用。
- とあり、現銀志向の強さを裏付ける。
- (27) 『支那省別全誌』第一八卷、直隸省、東亜同文会、一九二〇年、六〇五頁。
- (28) もっとも、西河棉区では石家荘でも匯兌の決済が行われた。これは、石家荘が山西から移入される
穀物の集散地であつたからである。奥地の穀物商は匯兌を石家荘の錢莊に売つて現金を入手し、雜穀
を仕入れていた。
- (29) 『天津商会檔案匯編（一九二二—一九二八）』天津人民出版社、一九九二年、一〇五三—五四頁、天
津商会頒發各棧房小錢舖不得欺哄破壞匯兌商規約的布告（民国一〇年四月一〇日）。因みに、吳石城、天
津之票拋与其精算」、『銀行週報』一九卷三八号、一九三五年）によると、前者の匯票は必ず券面に「面
生要保」あるいは「無保不付」と記されており、持参人に面識がない場合、保証人の紹介ないし代收
銀行号の裏書がなければ換金できなかつた。
- (30) 前註⁽²¹⁾大島、七七頁。
- (31) 曲殿元（直正）『中国之金融与匯兌』大東書局、一九三〇年、一四七頁。

(32) 前註⁽¹⁴⁾

經商者多於它県。天津・保定・北京。南宮之商尤多。

(33) 前註⁽³¹⁾ 曲、一四九頁。

(34) 薛不器著・森次勲抄訳「天津に於ける貨棧業」、『滿鉄調査月報』二二卷一号、一九四二年、七二頁。

原著は『天津貨棧業』新聯合出版社、一九四一年。

(35) 但し天津の外国商人は山東の棉作農民に対しては青田買いを盛んに行っていた。『支那省別全誌』第四卷、山東省、東亜同文会、一九一七年、七二六—七二七頁。

(36) 前註⁽²⁴⁾ 曲、一六九頁

且在郷間殷實富足的棉農。売棉俵款。並不急用。往往以棉花店為存款機關。以後零星支用。花店利用他人的資金。可通融款項与其他顧客。